

---

# 不器用な太陽達

天龍光照

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不器用な太陽達

### 【Nコード】

N9933Y

### 【作者名】

天龍光照

### 【あらすじ】

漆黒の闇に包まれ、雷雨に襲われる中、わずか6歳の少年リドーが何者かから逃げていた。途中、出会った赤子エドルフと共に不思議な家族に命を救われる。

やがて、大人になり、旅立ち、新たな友人、新たな友国と繋がり、彼らは親へと成長していく。

が、しかし、彼らと彼らの子供達との間には、何故か溝が…

様々な葛藤に苦しみながら、皆が各々、溝を埋める為、壁に立ち向かっていく。

子供から大人達へ。

大人から子供達へ。

それぞれの心、切なる願いは届くのか？

そして…溝は埋まるのだろうか…？

2011年11月29日

いろいろと直してみました、

相変わらずのへたっぶり…

ですが、どうぞ宜しく

再始動致します！！

天龍光照

## 第1章 3人の若者 登場人物

簡単な登場人物紹介

魔王：この世界を恐怖に陥れた魔法使い。

化け物：魔王の作り出した部下達。

クロムロフ：人々に嫌われた国の王であり、良き夫、優しい父。手から光を放ち、その不思議な力は、『傷を癒す』。

ペリーナ：美しい心配性な母。夫・クロムロフと同じく不思議な力を操るが、彼女のは『風を作る』力。

(王夫妻の子供たち)

イサク：迷子のリドールの第一発見者。優しく頼もしい皆の良い兄。

『火を出す』力が有る。

リドール：養子となった迷子。酷い傷を追う度、クロムロフに救われる。

エドルフ：リドールに拾われた赤ん坊。リドールを本当の兄のように慕う。

パシャ：イサクの弟でアローレンの兄。非常に大人しい男の子で、花や木が好き。不思議な力は…有るのだろうか？

アローレン：イサクとパシャの妹。双子の兄と違い、活発な女の子。リドールとエドルフには、10歳になってから会う。『歌声』に不思議

議な力有り。

（子供達の友人）

ビュール：イサクの同い年の幼馴染みで、爽やかな男。

ラック：イサクの同い年の幼馴染みで、無表情で目付きの悪い男。  
生まれつきなので、嫌わないうで欲しい…

ハドル：いつもビュールとラックにくっついてる童顔の男。『子供』から成長出来ていない性格。リドーがライバル？

（関係性）

クロムロフ：国王

夫婦

ペリーナ：王妃

（王夫妻の子供たち）イサク：第一王子

10歳差

リドー：養子

5歳差

エドルフ：養子

1歳差

パシャ：第二王子

— 双子

アローレン：第一王女

（子供達の友人）

ビュールとラック

— 8歳年下

ハドル

## 第1話 【少年と赤子】

ある寒い夜の事。

月明かりは分厚い雨雲で遮られ、漆黒の闇に包まれていた。辺りを照らすのは度々大きく鳴り響く稲光のみ。大きな雨粒に打たれながら、息を切らせた小さな肩が山道に照らし出された。

時は、はるか昔。魔法使いの王国が在った。魔法使いは、非常な身勝手で己の力で全てを支配しようと、自らを『魔王』と称し、世界を恐怖に陥れた。山を噴火させ、大地を焼き、むき出しになった大地を人間に掘らせては、手下として奇妙な化け物や、武器を作った。魔王は、度々手下を連れて、他国の村々を襲い、人間を捕まえ奴隷にし連れ帰った。捕まった人々は、魔王の国に連れて行かれる途中で、脱走を試みたが、ほとんどが連れ戻されるか、殺されるか、自殺するか。どこへ行っても、人々の遺体がそこらじゅうに横たわり、生きる望みなど、どこにも無い地獄絵図が広がっていた。そして、今ここにも、逃げ出してきた少年が1人。

「クッ！！はあはあ…」

年の頃は、まだ6つ。暗い山道を雷に怯えながら、それよりもっと怖い手下から逃げようと必死になっているのだった。雨に濡れたボ

口ポロになつた服が、少年の体温を奪い、湯気になっている。逃げ際に負つた傷で腕や膝も血だらけ、裸足の皮は破れ赤く腫れ上がった所から血が滲み出している。生死の境をフラフラになりながら走り続けているのだった。

「逃げなきゃ…逃げなきゃ…」

自分を逃がす為、盾となり死んだ見知らぬ大人達を何度も思い出し、少年は走り続けた。

「…生きるんだ…生きるんだ！」

少年は、何度も自分に言い聞かせるように、ただその気力だけで走り続けた。どれだけ走つたか。頭が朦朧とする中、足だけは前へ前へと進める。紫色に膨らんだ重たい足の引きずる鈍い音と雨音と雷が響く中、少年の耳が小さな音を拾つた。

「？」

少年の目の前には、今まで何度も見た、当たり前のようになつた地獄絵図の光景が広がっている。その中、赤子だろつか。存在を知らせるように泣き声が少年の耳を掴んで放さなかつた。

\*\*\*

薄明るくなる空の下、腰まで伸びた銀髪を輝かせながら長身の男が、



森の中を歩いてきた。そしてそれを追うように、薔薇のように赤い髪をツンツンに逆上げしたような短髪の少年が目を擦りながら付いてきた。

「眠たそうだな、イサクよ」

「いえ…」

「無理に付き合わんでも良いのだぞ」

「父上を一人にしたら、私が母上に叱られます」

朝露が葉を濡らす中、少年イサクは父親の後を追って森の中へと入っていく。天高く伸びた木々の隙間から、青白く明るくなっている空が見えるが、親子が立つ森の中は、木の影で、まだ薄暗い。薄く霧がかかり、少し肌寒くも感じる。しかも、シダ科の植物や、トゲを持った大きな葉を持つ植物、伸びて只の雑草とは思えないほど大きくなった草が鬱蒼と足元を覆っている為、地から飛び出している木の根も隠れてしまう。この森を知らぬ者は、2分に1回は気付かずに引つ掛かって転んでしまうだろう。そんな森がある目的の為、毎朝散歩している。この親子の暮らす国には、魔王の息はかかっている。喜ばしいことか、世界に1つだけの安息の場所。しかし、魔王が手を出さない事から、『魔王の実家』という噂が流れ、容易に歩けない森の存在も加わり、他国の人々に嫌われ忘れ去られた国。この国の者以外、誰も近づきはしなかった。魔王から逃げ出し、道に迷った者以外…。

「…今日は、誰とも会わんな…」

「昨夜は、平和だったという証でしょう」

息子の言葉に、うれしそうに父・クロムロフは頷いた。

「このまま、誰にも会わなければ良いのだが…」

2人は再び黙って歩き始め、父は目を瞑って歩いていく。木の根に引つかかる事も無く、小さな虫すら踏み潰さず、目を瞑ってひたすら歩く父の後姿を、息子は静かに見守っているのだった。

「！」

急に、父の動きがピタリと止まった。何を探しているのか、目を瞑ったまま顔を左右に振り、森の動きに耳を集中させた。それを見たイサクは、肩を落とした。

「こつちだ！！！」

突然走り出した父に驚きもせず追いかけた。ぐんぐん小さくなっていく父の背。必死に追いかけたが、今日も見失った。そう、いつもの事。父が、息子の速度に合わせる事は無いのだ。イサクは、いつものように大きく伸びた草をかき分け、大地の肌を出すと、そこに耳を当てた。すっぽりと草に隠れてしまう。しばらく耳を当て、意識を集中させる為、目を閉じる。

「…11時の方向…」

微かに地を伝って聞こえた父の静かな足音を逃さなかった。急ぎそちらの方向へ走る。しばらく走ると追いついた。と言っても、父はすでに、大地に座り小さくなっていった。静かに父の前を覗き込むと、イサクと同じ年頃の少女が父の腕の中で亡くなっていた。先程、天

に召されたのか。脈は無いものの、まだ体は硬直していなかった。

「また…また、助けられなかった…」

父は、少女の遺体を抱きしめながら、大粒の涙をポロポロと流した。まるで、我が子を失ったように。

「最後に父上に会えたのです。魔王や魔王の手下でなくて安心した事でしょう。」

息子の慰めも、目の覚めきらぬ森の中に消えていく。

「昨日も、一昨日も、その前も…声が聞こえたのに…助けを求めていたのに…救えなかった…」

毎朝のように、こうして泣く父の姿に「もう、やめましょう」と何度言いかけたか。イサクは、泣きたくなるのを堪えながら、自分より大きな父を抱きしめ続けた。どれぐらい泣いていたのか…突如、悲しむ親子から少し離れた場所に一つの小さな影が現れた。気付いたイサクは、じっとその影を見ていた。父は、気付かず泣いている。

（敵か！？）

警戒する中、影は、右へ左へとゆらりと動いたと思ったら、フツと消えた。

「ッ！！父上！！」

父から離れると、イサクはその影を確認した。影は消えたのではなく、倒れたのだ。影は小さな少年で、少年の口の近くで、若い草が

呼吸を報せていた。

「父上!!!生きています!生きていますよ!!!」

息子の言葉に我に返った父は、少女を木の根元にもたれさせると、息子の近くへと急いだ。イサクが、うつ伏せに倒れた少年の体を起こすと、親子は息を呑んだ。気を失った少年の腕の中には、赤子がしっかりと抱かれ、赤子は安心したようにスヤスヤ眠っていたのだ。

\*\*\*

森を抜けると、綺麗な白い石畳の道が出てくる。道の両脇には、綺麗に整えられた木々が立ち並び、それらに導かれて道を進むと、大きな庭園へ案内される。庭園には、四季折々の花々が植えられ、真ん中には大きな栗の木が1本どっしりと腰を下ろしている。その横には石造りの円形の噴水が設置され、涼しげに落ち着いた音色を奏でていた。そして、それらを眺める事が出来るデッキが有り、ここにはベンチが置かれている。デッキは、『井』の字のように木製の格子の入った窓が特徴の洋風の白い石レンガの小さな屋敷から飛び出している。屋敷の中は、庭とは逆側の方の玄関から入ると、一番先に入るのは、1階の真ん中に設置された螺旋状の階段とホール。そのホールの向こう側の30畳程の大広間から先程のデッキ・庭園へと繋がっているのだ。玄関から左手側には、もう1室15畳程の部屋が有り、この部屋からは、森に直接繋がる大きな掃き出しの窓がある。また、玄関から右手側には、台所と賄い達の休憩室が

有り、良い香りが鼻をくすぐり、誰もがその香りに腹の虫が騒ぐ。螺旋状の階段を登ると、2階には20畳程の部屋が1つと、この屋敷の主の書斎、3階には主の寝室と10畳程度の小さな部屋が3つ有った。部屋数を数えても、10室も無い事からこの屋敷が小さい事が分かる。小さいが、この館は、クロムロフを国王とした一国の城であつた。この小さな屋敷の1室に少年は居た。虹色に輝くガラスの入った窓からは、暖かい日差しと優しい風が、レースのカーテンを揺らした。風が通りすぎたベッドの傍には、綺麗な栗色のロングヘアの美しい女性が椅子に腰をかけていた。彼女の手には、あの少年の手が包み込まれるように握られていた。手を離すと、少年はうなされながら手を伸ばすのだった。

「怖かつただろうに…」

妻の悲痛な顔を見ながら、クロムロフは、少年の足の手当てをしていた。腕や膝に有った傷は、不思議な事に、今はもう無い。ゆっくりと、クロムロフが、紫色に膨らんだ足の裏に手を当てると、うっすらと優しい光を放ちだした。

「摩擦で火傷のようになって…ああ…血が固まっている…こんな足でよく逃げてきたものだ。」

「治りますよね？」

2階の20畳の部屋に、彼らは居た。赤子の寝かされたベッドの横で、イサクが尋ねる。父は、静かに微笑み頷いた。なんとも優しく静かな穏やかな時間。地獄絵図の広がる世界がすぐそこに在る事など想像出来ない程、平和に満ち溢れていた。その日は、ほとんどの時間、皆がその部屋にいた。起きたら腹いっぱいになるほどの食事を用意しよう。寝間着の替えはコレを用意しよう。歩けるようにな

つたら、こつゆう服と靴をあげよう。少年が深い眠りにいる中、親子はそんな事を楽しげに話しているのだった。

翌朝、いつの間に寝てしまったのか。クロムロフは、目を覚まして驚いた。

「ッ！ペリーナ！イサク！起きなさい！」

「…何？」

「…？」

「子供達が居ない！！」

寝ていたはずの少年と赤子の姿が無い。3人は慌てて、城の中、庭と探しはじめた。見張りをしていた衛兵達にも確認したが、誰も気づかなかったのか、慌てて他の衛兵達も集めて、子供達の搜索を始めた。

「きつと、驚いたんだ。国境を越えてなければいいが…」

少年を保護したあの森の切れた所が、国境だ。あの足では、そう遠くまでは行けまい。しかし、万が一、国境を越えてしまえば、魔王の手下が待っている悪夢の世界だ。クロムロフは森へ、ペリーナは城下の民の地へ、イサクは木の陰や洞窟の中などを探した。散々探したが、見つからない。でも、誰も探すのをやめようとはしなかった。そんな彼らを、探している衛兵がいた。衛兵がやっと、3人を見つけ城へ帰ると、子供達が戻っていた。しかし、少年は縛られて、口に詰め物をされている。

「なんて酷いことを！」

慌ててペリーナがその詰め物を取ろうとしたが、衛兵が理由を聞いて欲しいと言う。

「この少年は、ここに連れてきてから何度も舌を噛み切ろうとするのです。だから、詰め物をし、取らないよう手を縛ったのです。」

愕然とした。少年は、警戒した獣のようにペリーナを睨み付けている。

「…死にたいのですか？」

ペリーナは、少年の前に屈むと悲しい顔を見せた。少年の経験した恐怖を、彼女は知らない。理解は出来ても、心の傷はすぐには治せないのだ。警戒心の溶けない少年の横に来たクロムロフは、黙って詰め物を取ってやった。

「ッ！！！！」

「貴方！」

取った瞬間、やはり少年は舌を噛み切ろうとした。が、噛めなかった。阻止しようとして口に入ってきたクロムロフの大きな手を噛んだのだ。これに驚いたのは、少年の方だった。

「怖がらなくて良い。私達は、君達を守りたいだけなんだ。」

「……………」

噛まれた手からは、血が滲み流れた。

夕方。まだ口を開こうとはしなかったが、少年はやっと自分の名を紙に書いた。少年の名は、リドーと言った。

「この赤ん坊は、リドーの弟ですか？」

リドーは、首を横に振る。

「知り合いですか？」

リドーは、また首を横に振った。

リドーは、自殺を図ることはなくなったが、なかなか心を開いてく  
れず無言のまま1週間が過ぎようとする頃。

「…あ…の………」

小さく呟くような声に、クロムロフは振り返った。リドーの、声は  
実に幼く可愛い声をしていた。

「…どうしたの？」



クロムロフは、目線をリドーの高さに合わせて、優しくリドーの言葉を聞いた。リドーはこの村の子で、どう逃げてきて、赤子とどう会ったのか…

「僕は、もう捕まったら死ぬって思っていて…走るのも疲れて、それでも逃げたくて。何日も何日も山を逃げ続けて…。」

ただどしく話すリドーの言葉を聞き逃さないよう、クロムロフは「うんうん」と頷いて聞いた。

「寒くて、疲れて…ヘトヘトになって、捕まらなくてもみんなみに死んじゃうのかなって思ったの。」

「うん」

「そしたら…近くに女の人が死んでて、その近くの木の影で赤ん坊が泣いてたんだ…」

「それが、エドルフだったのか」

リドーは、コクリと頷いた。ペリーナに抱っこされたエドルフと名付けられた赤ん坊は、スヤスヤと眠っている。

「抱っこしたら泣き止んだんだ…そしたら…守らなきゃって…死なせたらダメだって…後は夢中で走ってた…んだと思う…」

あまりよく覚えてないと、付け加えた。

「そうか…よく頑張ったね。よく話してくれたね。」

クロムロフは、何度もリドールの頭を優しく撫で強く抱きしめてやった。

「頼もしいお兄ちゃんね」

その後、クロムロフ達は、リドールが生まれた村を探したが、灰となつて消えていた。その事は、リドールにも隠さず教えたが、この少年はそれについて泣く事もなく、静かに俯いただけだった。

## 第2話 【新たな家族】

リドーとエドルフが保護されてから、10年の時が過ぎた。

(…ここかな?)

庭の大きな栗の木を見上げると、少年はスルスルと登っていく。この少年は、15歳になったリドーだ。スラリと背も伸びて、肌の色は、少女のように白い。焦げ茶色のサラサラの髪を整え、じっと息を潜めた。

「もう、いいかあい？」

館の1階のホールで、そう問いかけたのは、あの赤ん坊だったエドルフだ。今は10歳。こちらは落ち着きの無い元気な男の子で、毎日城内を走り回っていた。そして、今日も。エドルフは、ドタバタと台所へと走る。台所では、真ん中に置かれたテーブルを囲んで5人の侍女達が休憩時間を楽しんでいた。

「あら、エドルフ坊っちゃん。一緒にお茶しない？」

侍女長は、まるで自分の孫に接するように声をかけた。

「しない。」

エドルフは、今それどころじゃない。キョロキョロ見渡し、ゴミ箱の影や、勝手口の外、食器棚の中を見て廻っている。

「…いない」

「お菓子有るよ？食べないかい？」

頭を団子結びした太っちょの侍女が、空いている椅子に招いた。

「…ん？」

エドルフは、侍女達を見つめた。侍女達は、少し焼きすぎて主達に出せなかったクッキーを自分達のおやつにしていた。味は、例え焼きすぎていても王家のお菓子。天下一品に旨い。それをエドルフも知っているし、エドルフは実は焼きすぎの方が好きだ。だから、よく自分の分のおやつを食べ終わると、こっそり台所に来ては侍女達のティータイムに混ぜっていた。

「はい。どうぞ。」

いつも身の周りを世話してくれているお姉さんのような侍女の一人が、エドルフにクッキーを手渡す。だが、エドルフは、何かじっと考えて動かない。

「どうしたの？」

「食べないのかい？」

双子の侍女が同じ声で問いかけてくる。

「あ！分かった！」

エドルフは、さっきからティータイムの様子が何か変だと、考えていたのだ。それは、侍女達の椅子の座り方だ。大きくはないテーブル

ルに体がくつつくほどに椅子を寄せて座っている。いつもなら、少し離れた感じにテーブルを囲んでいるのに、今日は違う。答えは、すぐに分かった。

「ここだ！」

エドルフは、テーブルの下に飛び込んだ。テーブルの下は、侍女達の長くて大きなスカートがカーテンのようになり、向こう側が見えない。エドルフが、そのスカートをどけていくと、テーブルの上では、侍女達が苦笑している。

「パシャ、見いけっ！」

侍女達のスカートカーテンの中には、エドルフと同じ年頃の男の子が、チヨコンと座っていた。

「あゝあ、残念。」

「見付かっちゃったね。パシャ坊っちゃん。」

「えへへっ」

パシャは、照れ臭そうに笑ってみせた。

「よし！次は、リーダー！」

「頑張つて！」

「うん！」

もう一つずつクッキーを貰うと、「ごちそうさま。と、二人は手を振って台所を出た。

「本当に仲良しね。」

「本当の兄弟みたいね。」

パシャは、エドルフの一つ下のクロムロフ王夫妻の実の子で、リドーとエドルフが保護された1年後に生まれた。保護された2人は、クロムロフ王夫妻の子供として育てられている。養子になったのだ。皆、仲が良く、本当の家族のように暮らしていた。そして、クロムロフ王夫妻の実子で、リドー達を見付けた長男イサクは25歳になっていた。若いながらに、立派に軍を統率する指揮官に着任している。指導力も武術も人より長けていた為、皆からの信頼も厚かった。ただ、仕事をするようになってから、弟達とかなか遊べなくなった。それでも、リドーとエドルフはこの兄が大好きだった。顔は、仕事のせいか恐面こわもてだったが、背は190センチと高く、背中は子供2人を乗せれる程がっしりと広く、腕や脚は太く長く、男が憧れる程の男臭い良い男になっていた。そして、昔と変わらず優しく、髪の毛は赤く短髪だった。

「リドー？そこで何している…。」

(シー！！静かに！)

訓練を終え、久々に早くに帰宅してみると、木の上でじっとして動かないリドーを見付けた。

「?」

様子を見てみると、小さな弟達が駆けてきて、イサクの目線の先を指さした。

「あ、やっぱりいた！次は、リドーが鬼だよ！」

「ち…イサクのヴァカ…」

「…すまん…」

15にもなつて、かくれんぼつてのもどうなんだ？などと、苦笑しつつもリドーの面倒見の良さにイサクは感心するばかりだ。イサクとは正反対だがなかなか良い男になったリドーは、恋人が出来ても良い年齢だ。リドーは、民の女達から多くのラブレターが届くのだが、赤面し読みもしない。一度、一つだけ開けた事が有ったが、熱烈な恋文が書かれており、この事も有ってリドーは女を苦手としていた。だから、リドーにとって城は気楽に過ごせる場所なのだが、弟達の遊び相手をする理由は他にも有った。リドーが、エドルフから目を離す事は無かった。

「俺が生きているのは、エドルフに会ったからだ。エドルフに会わなかったら、死んでいた。」

だから、自分はエドルフを生涯守るのだと、いつも口癖のようにリドーは言っていた。

「おい、リドー。ガキの相手ばっかしてねえで、たまには付き合えよ」

リドーに、長い棒を投げてよこしたのは、17歳で身長160センチの童顔の兵士のハドル。

「なっ！ガキじゃないやい！」

「ガキだよ。オチビ。」

「違っつたら！！パシャ！君も何か言いなよ！」

パシャは、エドルフの後ろに隠れてしまった。

「何も言えねえよな〜」

「よせ、ハドル。イサクが怒ってるぞ」

いつから居たのか。木の陰から、肩まで黒い髪を伸ばした優しい顔したビュールと、スキンヘッドの細い釣り目の無表情のラックが現れた。

「ラックが、『どんぐりの背比べ』だつてさ」

「あんだとーラック　　！！！」

イサク・ビュール・ラックは、同い年の幼馴染で、ビュールは175センチ、ラックは180センチと背が高く、3人が並ぶと威圧感すら感じてしまう。ハドルとリドーは、よくこの3人の稽古に混ぜてもらっていた。

「ハドルは、君に身長を抜かされた事が悔しいのさ。相手してやつてよ」

優しい笑顔でビュールが、そうリドーに声を掛けた。と言っても1・



2センチの差なのだが…

「は！誰が悔しいもんか！すぐに抜かしてやるよ！」

「…無理するな…」

無表情でボソツとラックに言われ、余計に悔しい。

「僕のほうが年上なんだ。勝負しろ！手加減してやるよ！」

「リドーは、ハドルより強いぞ！リドーやっちゃえ！！」

負けじと言い返すのは、エドルフ。そうだ！そうだ！とパシヤも心の中では言い、やれやれとばかりにリドーはハドルと勝負する事になり、打ち合いが始まった。そんな様子を、クロムロフ王は庭の見える上階のテラスから微笑ましく、いつも見ているのだった。

そんなある夜の事。兄弟達が、隣で寝ている中、リドーだけ、どう足掻いても寝付けられず、ぼくと部屋の窓から月を見ていた。こんな事は、度々有った。どんなに寝ようとしても、魔王の手下に襲われ、捕まり、逃げ出し、追いかけれ…と、安心できる場所に居ても、恐怖の記憶はリドーの心を苦しめた。

「？」

月明かりに一瞬、庭で動く物を見た気がした。きつと鹿などの動物

だと思ったが、同時に魔王の手下かもしれないと思い、そつと確認しようと思へと降りていった。月は、満月だった為、庭も近くの森も明るく照らし出してくれた。

(魔王の手下なら、満月の日に動くはず無いか…)

きびすを返し部屋に戻ろうとした時、森の方からガザガザと音がした。びっくりして、パツと、身構えていると現れたのは10歳程の少女。クルクルと自然な巻き毛の少女。

(なぜ、こんな夜更けに女の子が…新手の手下なのか…?)

緊張しながら身構えていると、少女の方もリドーに気づいた。

「えっと…どうかした？リドー？」

「へ？」

「リドーでしょ？」

「…」

「…私、アローレンよ」

なぜ自分を知っているのか、この少女は誰なのか。分からず頭が混乱する。

「こんな夜更けに何してるの？っていうか、何で僕を知ってるの？」

約10年、同じ館にいて初めて会った少女は、リドーの手を取り笑

顔で答えた。

「パシャが、リドーとエドルフの事をいつも聞かせてくれるの。だから、きつとリドーだって思っで。こつち来て。ここじゃ、お父様に見つかる。」

リドーは、あつと声を出しそつになつた。過去の記憶を思い出したのだ。それは、保護され1年経つた頃、双子の赤ん坊を見せられた事が有つた。記憶違ひと思ひ込んでいたが、そつではなく、パシャには双子の妹がいて、その子がこの子なのだ。この国の独特の習慣で、未婚の女性は、赤ん坊を除き子供でも家族以外の者に姿を見せてはならないと決まつていた。だから、この10年間、お互い顔を見ずと同じ城内で時を重ねていたのだつた。

「変だよ。リドーもエドルフも家族なのに、会つちやダメつて言うのよ。私だつて、皆と遊びたいのに…」

父は一度、リドーとエドルフにも会わそうとしたらしい。しかし、それに反対したのは母だつた。母が言うには、例外を作るのは良くない。娘に変な噂でも立ち、結婚出来なくなつては困る。との話だつた。自国意外の人間を保護した事も初めてだつた為、いきなり習慣を変える事は皆が戸惑うと言つたのだ。

「お母様のおつしやる事も理解出来るわ。でも…やつぱりリドーとエドルフには会いたかつたから、会えて嬉しい」

少女はひまわりの様に笑顔を向けた。

「あ、でも今夜の事は内緒ね。」

「そうだね。ペリーナ様が怒ると嵐になるからね」

冗談ばく言うと、二人して笑った。少し歩くと、小さな花畑に出てきた。そこは、青い小さな花が所狭しと花を咲かせている。

(夜なのに、花が開いてる…)

「この子達は、夜に起きるの。みんな出ておいで」

「この子達…?」

不思議に思うリドーと笑顔のアローレンの他には人の姿は無い。が、しばらくすると、ポオウと小さな光が花の中から次々と顔を出した。

> i 3 0 3 9 6 | 3 1 7 3 <

「コレは…」

「見た事ない?花の妖精達よ。」

妖精達は、親指ほどの背で、ピヨンピヨン花の上を弾んでアローレンの足元に集まってきた。

「満月の夜は、ここですべておしゃべりするの。リドーもどろろ?」

「妖精って、羽が有るんだと思った…」

「それは、蛭族の妖精達よ。この子達は、ユリ族の妖精達なの。」

「種族があるの?」

その日以来、2人は夜に決まってこつそり会うようになった。2人は、散歩しながら話す事が多く、アローレンの部屋は玄関横の15畳程の部屋だと分かった。また、満月の夜には森へ出て、リドーはアローレンに薬草を教わった。アローレンは、兄のパシヤと違いやんちゃな女の子で、時には、木に登ったり、木から木へ飛び移ったり、大きな木の枝を見つけると、リドーに武術を教えてもらおうとした。

「女の子は、木に登っちゃダメ。剣だって、覚えなくて良いんだよ。」

こんな会話になると、アローレンは決まって不機嫌な顔をした。

「もうっ！女、女って！皆、そう！あれするな！それするな！息が詰まるわー！！」

今日のアローレンは、いつもより機嫌を悪くした。

「大体、誰が決めたのよ！そんな事！！私は、強くなりたいの！誰かに守られるんじゃないわ！自分で守りたいわ！」

「…」

なんと答えて良いのか戸惑ってしまっ。

「男達が皆死んじゃったら、武器の使い方の分からない女はどうなるの？おとなしく死ねと言っの？」

「そっじゃないよ。」

アローレンは、じいいとリーダーを見ている。

「あ、分かった！女が男より強くなるのが、怖いんだ！そうでしょ」

「違つよー！」

「じゃあ、教えて。」

身を乗り出して教えを乞うアローレンに、リーダーは難しい顔をする。

「…」

「リーダーは、弱いのか？」

「はあ…分かったよ。その代わりに、高い所に登ったり、僕を心配させないって約束して。」

リーダーの根負け。と言うより、女に口で勝とうなど無理なのだ。こうして、リーダーの一番弟子となったアローレンの飲み込みは、早かった。

\*\*\*

「アローレン様！そんな物騒な事おやめ下さい！」

昼間に一人、室内で剣の稽古していると、双子の侍女達に止められた。

「キャツ！危ない！」

「あっ！！」

横振りに振った剣が、花が飾ってあった花瓶に当たってしまった。アローレンも侍女2人も、目をつむって割れる音が響く事を覚悟した。

「…？」

するはずの音がしない。恐る恐る目を開くと、侍女長が真っ青の顔で生けてあった花や水を被りながらもギリギリ花瓶を受け取っていた。

「あ…あの…」

「休憩時間になっても来ないから…何か有ったのかと思って来てみれば…」

侍女長がわなわなと震えている。アローレンは、恐ろしくなり双子の後ろに隠れたのだが、双子も震えている。この後、3人はたっぷりと絞られたようだ。

さて、そんな事が起きていたとは知らず、デッキの方では。

「リーダー起きろよ」

「また、寝てる…」

リーダーは、昼間のデッキで寝る事が多くなった。

「寝かしてあげなさい。気持ち良さそうじゃないか。」

「父上、今度、僕も朝の散歩連れて行ってください。」

今は、イサクに代わりリーダーが散歩に付いて行っていた。

「楽しい散歩ではないよ？それに早起きしなくては。起きれるかな？」

「起きます！いつもリーダーばかり…」

「あはは、寂しいか？」

「…」

「リーダーが好きかな？」

エドルフもパシャも、コクリと頷き、クロムロフは満足そうに笑った。本当に気持ちの良い天気で、エドルフもパシャもいつの間にか、リーダーの隣で寝てしまい、クロムロフはその脇で読書を始めた。昼休憩を取ろうと、ペリーナがデッキへ出てきた。手には毛布を持つ



ている。

「…風邪ひきますよ…」

そっと、ペリーナは子供たちに毛布をかけてやった。

「ね、あなた。」

「ん？」

「リドーのこんなに安心した寝顔初めて見ましたわ。」

「そうかな？」

ペリーナは、スヤスヤ寝る子供達の顔を覗き込みながら微笑み、そして、少し悲しげだ。

「お気づきですか？リドーが、私達の事、父とも母とも呼んでくれないのを…」

「…」

「もう十年にもなるのに…未だにこの子の考えている事が私にはわかりません。」

クロムロフは、屈んだままの妻の背中を見つめた。

「嘆く事ない。一緒に食事するし、子供達とも民達とも仲が良い。私達を好いてくれている。ここで、笑って生活している。ただ、目の前で、両親を殺された子だ。御両親への愛情も今もすっかり持つ

ている。散歩に行くとな、必ずある方向をじっと見ているんだ。あの子の生まれた村があった方向をね。生みの親に対する愛と、私達に対する愛。どう表現すれば良いのか、分からないんだよ。しっかりしているけど、不器用な子なんだよ。気長に待とう。私達が焦ってはダメだ。いいね？」

クロムロフは、読書の続きを始めた。

「それと…アローの事なんですけど。」

「今度はアローか。君は、少々心配事が多すぎだよ。ここにお座り。気持ちが良いぞ。」

苦笑いをしてペリーナを膝の上に乗せた。

「私をからかわないで下さい。親なので、子供のことを心配するのは当たり前です。」

「そうだね。アローがどうかした？」

夫の変わらず穏やかな笑顔に、ズルさを感じながらそんな所に惚れた事を思い出す。顔が赤くなるのを見られないよう、妻は膝に乗ったままそっぽを向いた。

「あの子も、昼間にもものすごく眠たそうにしている事があるんですよ。どこか病気じゃなければ良いのですけど。」

「君の判断は？」

「剣を振り回したり、おかしい行動も多いですが、どこにも異常は

無いと…でも…」

「分かったよ。後で、私が見てこよう。」

夫に髪を撫でられながら、昼休憩を終え、ペリーナは自室へ戻っていった。

コンコンッ

「あら、お父様。」

「私の可愛い姫君はお元気かな？」

「やだ、お父様ったら。変わりなく元気よ。どうなさったの？」

アローも双子の侍女も、花瓶の件で怒られるのではないかと内心ヒヤヒヤしているのだが、侍女長は黙っている事を約束してくれていたので、平静を装った。

「母上が心配してますよ。病気じゃないかって」

「あ…ごめんなさい…」

「元気なら謝る事ないけど、それとも、嘘かな？」

「いえ、元気です」

父は、優しく微笑んだ。

「…リドーに会うのは止めませんが、夜更かしは良くありませんね。」

「え?」

気づかれていた。全て見透かされたように、笑顔で父の目は自分の記憶まで読み取るようだった。

「1」…「ごめんなさい…」

「母上が知ったら、怒りますよ。」

「お母様には、黙ってて!」

「ん〜でも、このままではね…他の者達を知っても得になる事はありませんし。」

「得?」

「あなたの清らかなイメージが崩れるのですよ。非行者だとね。良いのですか?」

「…」

非行と言われるのは嫌だが、だからと言って、やっと出来た唯一の楽しみが無くなるのもツラく困ってしまった。

「…ごうじまじょう」

クロムロフは、こっそり何かアローに耳打ちしてやると、ニクニク笑って部屋を出ようとした。

「ああ、そうそう…」

何か思い出したようにクロムロフは、アロー達に振り返った。

「元気なのは良いけど、侍女達に迷惑かけてはいけませんよ。いいですね？」

やはり全てお見通しなのだ。いたずらっぽく笑うと父は部屋を出て行った。

### 第3話 【不思議な力】

それから数日後。

「では、ペリーナ。行ってくるよ。」

「お気をつけて。アロー、お父様から離れてはダメですよ。」

馬にまたがった父の前には、抱えられるようにマントで隠れるようにしたアローレンが乗っていた。クロムロフが出て行くと、今度はイサクがエドルフを前に乗せ、リドーも別の馬で現れた。

「では、母上、パシヤ。私達も出かけますので。少しの間、留守をお願いします。」

「ええ、気をつけて。数日ですけど、しっかり周りの国の様子を見てくるのですよ。イサクから離れないようにね。」

そうして、しばらくイサク達が走っていくと、国境でクロムロフが待っていた。

「感づかれたかな？」

「いえ。でも良いのですか？こんな事して。」

クロムロフが提案したのは、クロムロフとアローで隣国の王の元へ久々の挨拶へ向かう日に、イサクが教育目的でリドーとエドルフを連れて数日旅に出るといったものだった。両者とも決して嘘ではなく、

ただ、合流して行くとは、伝えていないだけ。当初の予定では、パシャもアローと一緒にだったのだが本人が嫌がったのでアローだけになったのだ。

「こつそり、会われるよりマシという物ですよ。それに、エドルフ。コレが、私の娘アローレンだ。」

やっと、この時エドルフとアローレンはお互いの顔を知った。お互いなんともぎこちなく会釈だけを交わす。

「…？リドールは知っていたの？」

不思議に思い前方を見つめるリドールに問いかけた。

「ん…うん…」

リドールは、どこか上の空でそれに答えた。また、ほとんどアローレンと目を合わそうとしなかった。リドールは異常に無口になり、アローレンだけでなくエドルフにも顔を向けようとはしなくなっていた。一方、そんな様子のリドールの態度を見て、エドルフは自分に隠し事をされていたような悲しい気分になっていた。

「リドールはどうしちゃったの？」

気にするアローレンは、父に問いかけた。

「そうだね。きっと、太陽の下でアローを見るのが恥ずかしいんじゃないかな？」

「違います。」

クロムロフのふざけた答えを、リドールは怪訝そうに瞬時に否定した。クロムロフは、面白そうに笑っている。

「アロー、歌を歌ってくれないかな？優しい歌が良い。」

イサクが優しいフォローをしてくれる。

「歌？」

「歌っておあげ。」

イサクの提案に、クロムロフも賛成した。よくはわからなかったが、アローは歌いだした。優しく澄んだ、そしてやわらかい毛布のような歌声がどこまでも響いていくようだ。リドールは、恥ずかしくて無口になっていた訳ではない。それをクロムロフもイサクもちゃんと理解していた。保護されてから初めて国外に出たのだ。リドールは、心が幼い日の恐怖で押しつぶされそうになるのを必死で耐えていたのだ。

「…」

前方を進んでいたリドールは、馬を止めて歌い手を見つめた。なんとも不思議な歌だった。リドールは、自分の固まっていた心がやわらかくなっていくのを感じていた。

「少しは、落ち着いた？」

先ほどと表情が変わったの確認するようにイサクが話しかけてきた。



「…うん…イサク、コレって…」

「アローの歌？」

「うん」

イサクは、優しく微笑む。

「アローの歌声には、不思議な力が有ってね。人の感情を高ぶらせたり、鎮めたり出来るんだ。」

リドーは、アローが歌っている間、馬を進めながらも何度も振り向いてはアローの歌声に耳を傾けた。

(アローの髪って、緑色だったんだ…)

そんな事を考えながら、耳は後方のアローに向けながら馬を進めていく。しかし、そんな様子が気に入らない者が一人。エドルフは、まだ複雑な気持ちを抱えていた。自分の知らないうちに2人は知り合っていた事も気に入らないし、聞こえてくる歌すらも邪魔に思える。

「あまり乗り出さないでくれ。落としてしまいそうだよ。」

「ああ、ごめんなさい。でも…」

「楽しい？」

「うん…!」

気持ちの後ろにいるイサクにすら気づかれないよう、周りの風景に夢中のフリをして隠していた。イサクは、良かった。と笑顔を向けると、またリドーと話し始めた。

「父上の力は、知っているかな？」

「治癒の力の事？」

「…？チユの力？何それ？」

興味深々に会話に混ぜられた。

「ああ、そうか。エドルフは知らないんだね」

「…知らないよ。知らない事だらけだ…」

エドルフは頬を膨らませて拗ねた様子。そんなエドルフの頭をイサクは優しく撫でてやる。

「いつか分かるよ。でも、もっと強い力を持っているんだよ。」

「もっと強い力…？」

それは、まだリドーも知らないのか首をかしげた。

「もしかして、イサクも？イサクもその力つてのが有るの？」

エドルフは、イサクの顔を見上げて尋ねた。

「旅の途中で、見せてあげられるよ」

イサクが笑顔で答えると、エドルフの目はキラキラした。

「何か出来るんだ！え？何だろ？何？何が出来るの？」

「今は教えないよ」

「ええ、良いじゃん！教えてよ！何が出来るの？」

エドルフは、興奮して大きな声で問う。そんな様子にずっと歌っていたアローは嫌気がさし、歌うのを止めた。

（何よ…無視してくれちゃって…）

「あれ？どうしたの？もう歌わないの？」

邪魔にすら感じていたが、突然聞こえなくなった歌声に疑問を感じた。

「ふん、知らない。」

ブイツとそっぽを向いたアローの心境など、まだエドルフには分かっていなかった。

（なんだよ…変なヤツ…）

アローは、それからしばらく不機嫌だった。どんなにクロムロフが宥めても、意地として機嫌を治してはくれなかった。

「もう、ほつとじつよ」

イサクが、点けてくれた焚き火に当たりながら、エドルフは詰まらなさそうに横になった。なかなか仲直りが出来ないまま、何日目かの夜。また、いつものようにイサクが手をくるりと回すと、手の中に小さな火が現れる。それを、枯葉にふっと吹きかけ焚き火にし、食事の用意を始めた。

「3人とも、ここから動くんじゃないよ。」

「俺と父さんは、薪を拾ってくるからね。」

気まずい仲を何とかしてほしくって、わざと2人は、子供達だけにした。なんとも気まずい空気の中、リドーは魚を木の枝に刺し焚火の横に立てる。アローは黙ったまま、膝を抱えて火を見つめていた。

「リドー、魚はまだ焼けない？」

沈黙を嫌ったエドルフが、リドーに話しかける。

「まだ、待った方がよいよ。」

無表情に答えたリドーに対し、またエドルフが尋ねる。

「リドー、お湯沸かそうか。父上達、コーヒー飲むよね？」

「ねえ、リドー」

「ねえ、リドー」

エドルフは、ずっとリドーに話しかけ続けた。アローは、まだ、黙って火を見つめているだけ。

「エドルフ。なんのつもりだ？」

さすがに、いつもニコニコしているリドーの顔が少し怒っている。

「何…って別に…」

(僕は何も悪くないじゃん)と言いかけたが、リドーに睨まれ言葉を飲み込んだ。こんな風にリドーの機嫌を損ねた事は、今までに無い。どう対処しようか悩んでいると、リドーは、エドルフから視線を逸らし、魚の焼き具合を確認している。

「…俺は、今のエドルフもアローも嫌いだ。」

「「…!」「」

リドーの言葉にエドルフもアローも、ショックでしばらく黙っていたが、最初に口を開いたのは、エドルフだった。

「…なんだよ…」

エドルフはわなわなと震えている。

「なんで!?なんで、嫌われるんだよ!?!こいつはともかく!?!」

勢いよくアローを指さす。

「なっ！？なんで、私が嫌われるのよ！あんたがいけないんでしょ！？」

さすがに黙ってられない。アローが反論した。

「僕が！？僕の何がいけないんだよ！」

「人が歌っているのを、大きな声で邪魔するからじゃない！」

「はあ！？邪魔なんかした覚え無いね！！お前が、いつまでも歌っていたから飽きたんだよ！！」

「なんですって！？」

いまにも掴み合いの喧嘩になりそうなのを、リドーが冷静に2人の間に立ち距離を保たせた。

「だいたい、なんで、リドーはこいつの事知ってたんだよ！！」

「え？」

突然の問いかけにリドーは目を丸くした。

「何それ！？別に良いじゃない！」

「良くない！なんで、いつも一緒なのに、僕の知らないヤツが…」

エドルフの悔しそうな顔を見て、リドーは少し罪悪感を感じた。

「何それ？やきもち？」

バカにしたようにアローが半笑いで、言葉を投げる。

「アローやめなさい。エドルフも…」

諫めたつもりが油に火を点けてしまったようだ。リドーは、言い争いを止めようとしたのだが…

「そうだよ！やきもちだよ！！リドーは、僕のお兄ちゃんなんだ！お前のお兄ちゃんじゃない！！」

「私にとつてもお兄ちゃんよ！同じ家族なんだから！！」

「やめるんだ、2人とも！」

もう止まらなかった。2人を抑えようとした手は振り払われた。

「お前には、イサクもパシャもいるじゃないか！！リドーは、僕のだ！！！僕にはリドーしか居ないんだ！！！横取りすんな！！！！！！」

「ひどい！！血が繋がってないと、家族じゃないの！！？だったら、あんたも、リドーと血なんか繋がってないじゃない！！！本当の兄弟じゃないわよ！！！！！！」

アローは、言った後でハツと我に返り、口を手で塞いだ。が、時すでに遅し。目の前には、エドルフが傷ついた様子でうなだれている。リドーも酷く傷ついた顔をしていた。

「お前なんか…お前なんか…大ッ嫌いだ！！！！」

キツとアローを睨むと、大粒の涙を流しながらエドルフは、クロムロフの言いつけを忘れ、知らない森の中へと走って行ってしまった。

「…お前はここにいる」

リドーは、アローの顔も見ず背を向けるとエドルフを追っていった。

「…はあ…わたし…わたし…」

言うてはいけない言葉が頭の中で繰り返された。後悔と恐怖で、アローの目から涙が溢れ出てきた。

「名前…呼ばなかった…」

リドーが本気で怒っている事、嫌われたかもしれない心細さで、更に後悔の波が押し寄せて来た。

「少し、離れすぎたかな？」

「戻りましょう。いい加減、仲直り出来てますよ。」

戻ったクロムロフ達の目には、3人の姿が消えていた。

「まずい…」

「そう遠くへは、行って無いだろう…探すんだ」



その頃、アローは、泣きながら居なくなってしまうた2人を探していた。

「エドルフ            ！！リド            ！！どこ            ？」

周りは、音も無く暗い森の中。必死に呼びかけながら、アローは二人を探した。

「ごめん…私、あんなひどい事言っ…ごめんなさい！謝るから！  
お願い！2人とも出てきて！！」

「ヒヒヒ…こりゃ良い…旨そうな女の子供だ…」

不意に、アローは後ろから聞こえた声に足を止めた。聞いた事の無い薄気味悪い声だった。

「…」

アローは、恐る恐る振り向き、恐怖で声が出なくなった。喉に物が詰まったように声が出ない。後ろに居た者。それは、あの魔王の手下だった。手足は細く長く、小さな尖った耳が4つも頭に付いている。黒ずんだ皮膚は腐っているのか、酷い悪臭がしている。初めて感じる恐怖感。震えるアローに薄気味悪くニヤツと笑うと、魔王の手下は剣を高々と上げた。

「グアッ！」

しかし、上げた所で魔王の手下は、目を覆って悲鳴をあげた。

「アロー！逃げる！！」

「こつちだ！！」

振り向くと、来た道を引き返してきたリドーとエドルフがいた。2人は、魔王の手下の目に石を投げつけたのだ。エドルフは、しっかりとアローの手を掴むと走りだし、リドーは二人の後方で、まだ追ってくる魔王の手下に石を投げ続けていた。

「父上！父上！！」

エドルフは、必死でアローの手を掴み走りながら、クロムロフを呼び続けた。が、その声も足もピタリと止まった。目の前に、もう一匹、魔王の手下が薄気味悪く立っていたのだ。こつちの手下は、酷く背骨が曲がり、両手両足の幅が大きい。両手の爪は鋭く長く伸びている。前にも後ろにも、進めなくなつた。リドーは、二人にだけ聞こえる声で話しかけた。

「エドルフ、アロー、よく聞くんのだ。」

リドーは、向きを変え、敵を左右に、二人を背に隠すように立った。

「このまま少しずつ後退するんだ。で、俺の合図とともに後ろの方へ真っ直ぐ走れ。もう少し頑張れば、焚き火のところに出られるはずだ。良いね？」

2人は、おとなしくリドーの言葉に頷いた。 1歩…2歩…3歩…少

しずつ後退し…

「今だ！行け！！」

エドルフとアローが言われた通り、パツと振り返り再び走り始めた。同時にリドーは、足元に落ちていた太めの木の枝を持つと手下達に立ち向かっていった。

「リドー！！！！」

「早く行けえ！！！！」

「父上…ちちうえ

つつつ！！！！！！」

エドルフは、大きな声で、叫び始めた。走れと言われているのに、ただひたすら叫んだ。

「どんなに叫んだって、どんなに逃げたって、誰も迎えになんぞ来るもんか！！」

手下達は、しばらくリドーの木の枝を避けていたが、そう言うとりドーから枝を取り上げ、鋭い爪でリドーの顔を引っかいた。爪は、リドーの右目の目頭から、鼻っ柱を横切り、左の頬へとザツクリと3本の線を入れた。毒でも塗られていたのか、リドーの顔からはジューと焼けるような音と煙のような物が出ている。

「うあああツツツ！！！！」

リドーは、痛み、苦しみに、その場に倒れこんでしまった。手下は、爪に付いたリドーの血を旨そうに舐めた。

「お前が、どんなに足掻こうがな、どんなに立ち向かってこようが、所詮わしらの相手じゃねえ。よえくんだよ。ガキ。」

「2人とも…逃げるんだ…」

リドーは、汗を流し、顔を抑えながら必死に立ち上がろうとする。

「無力だ。無駄な事。」

黒ずんだ手下が、幼い2人を狙いリドーの横を通り過ぎようとした。

「無力じゃない…守って見せる…」

「まだ言うか。」

「いくらでも言うてやる！！俺の弟、妹に指一本触れさせねえ！！」

「！」

そうゆうと、リドーは仁王立ちになり、2匹の手下の前へと出た。

「殺してくれる。」

黒ずんだ手下は、リドーを蹴飛ばすと、あばらの上に片足を乗せ、どンドン体重を乗せていった。リドーのあばらは、ミシミシと悲鳴をあげ、リドーは酷い悲鳴を上げた。

「良い声だ。さあ、もう少しで、折れるぞ。折れるぞ。ほら、折れた。」

あばらが、2・3本折れたのか、酷い音はエドルフ達にも聞こえた。

「キヒヒツツ良い音だ」

「さあ、次はお前達の番だ。」

薄気味悪い笑顔をエドルフ達に向ける。

「その子から放れる!!!」

大人の声に、驚き振り向いたリドーの上にはいた黒ずんだ手下は、頭に矢が刺さり倒れ、それを見た爪の長い手下は、一目散に逃げ去っていった。

「なんて、ひどい事を!!!」

声はクロムロフ、矢はイサク。2人は、バラバラに探していたのか、違う所から、姿を現した。

「酷い…動かすのは危険です。」

「うむ…骨が心臓か肺に刺さるかもしれんな…」

クロムロフは、リドーの治療をその場で始めた。クロムロフは、そつと、リドーの腹に手を当て、まるで念じるように、目を閉じ集中し始めた。すると、クロムロフの手から、白く明るい光が現れたかと思うと、その光はリドーの体をすっぽり包み込むように大きくなった。非常に強い光で、そして、とても暖かい気持ちの良い光。

> i 3 0 3 9 7 — 3 1 7 3 <

「コレが…父上の本当の力…」

「お兄様が手から火を出すのと、一緒みたい…」

いや…イサクの出す小さな火とは比べ物にならない。非常に強い力だった。

「再生の力だ。」

しばらく、時間が止まったように、イサクもエドルフもアローも動かず、じっとその光を見つめ続けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9933y/>

---

不器用な太陽達

2011年12月16日23時52分発行